

1. 背景とねらい

モニリア病の防除は古くからりんごの発育に合わせて散布することが指導されてきたが、近年気象変動が激しく、りんごの発育早晩も大きく影響を受けており、これに対する病原菌の動きについては明らかになっていなかった。また葉ぐされの多発園では、病斑進展による花ぐされや病斑上の分生胞子形成を抑制させるために開花直前に治療剤を散布してしているが、必ずしも十分な効果をあげていない。そこで近年の発生特徴を解析し、薬剤の治療効果について検討した結果、知見が得られたので指導上の参考に供する。

2. 技術の内容

1) 子実体（伝染源となる子のう胞子の形成器官）の発育早晩は気象の影響を強く受けるが、概ねりんごの発育に準じており展葉期の前後に子のう胞子の飛散盛期が認められる。

2) 芽出当時～芽出14日後の降雨状況によって葉ぐされの発生が影響され、降雨日数及び降水量が多いと多発し、少ないと少発になる。

3) 葉ぐされの発生状況を観察し多発傾向の場合、ロニラン水和剤 1,000倍を発病初期に特別散布する。これにより病斑進展を抑制し花ぐされを防ぐことができる。また病斑上における分生胞子の形成を阻止することができ、実ぐされの伝染源を絶つことができる。

4) 適応地域 県下全域

3. 指導上の留意事項

1) 子実体の発育は概ねりんごの発育に準ずるが、りんごの発育が著しく遅れた昭和59年には子のう胞子の飛散盛期は芽出当時にずれたことから、子実体の発育状況については発生予察情報を参考にする。

2) 葉ぐされ防除のため、芽出当時（発芽50%、通常発芽 3日後が目安）と芽出10日後の2回、薬剤を散布する。とくに芽出当時の散布が重要であり、降雨前の予防散布に失敗すると被害が大きくなる。

4) 葉ぐされは芽出当時の感染のものが開花10日前ころから発生し、開花直前には分生胞子が既に形成され、これが中心花の実ぐされの原因となる。これを防ぐために葉ぐされの発生状況を観察し開花 5～7日前を目安にロニラン水和剤を散布する。病斑が葉身から葉柄部に達したものは進展を抑制できず、胞子が形成されるので、散布が遅れないようにする。

5) 実ぐされの多発が懸念される圃場は満開時にトップジンM水和剤 1,500倍を特別散布する。なおミツバチを導入している場合はミツバチを撤去する。

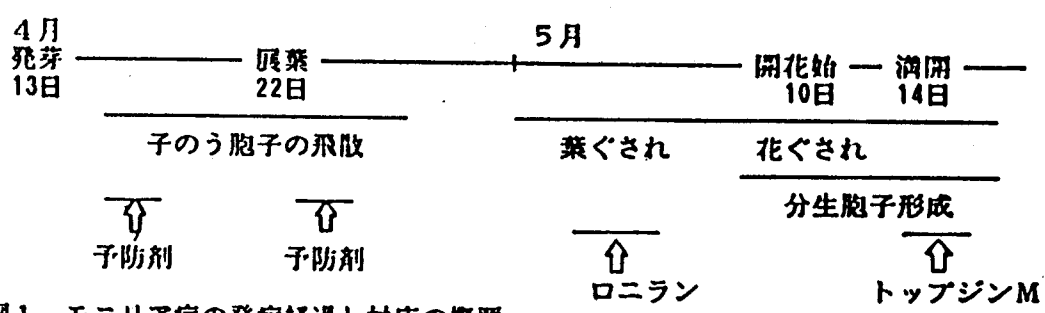


図1 モニリア病の発病経過と対応の概要

4. 試験成績の概要

	4 月							5 月			
	1日	5日	10日	15日	20日	25日	30日	5日	10日	15日	20日
平成 1	発	=====	展	==●=====				開			
昭和63			発	=====	展	=====				開	
昭和62		発	=====●=====	展	==					開	
昭和61		発	=====	展	●=====					開	
昭和60		発	=====	展	●=====					開	
昭和59						発==●=====	展				開
昭和58		発	==	展	=====			開			
昭和57		発	=====	==●=====	展	=====				開	

図2 モニリア病菌の子実体の発育とりんごの発育

発：発芽期 展：展葉期 開：開花始期
 ===== 子う胞子主な飛散期間 ●調査日の中での最盛期

表1 薬剤の葉ぐされ病斑進展抑制効果及び分生胞子形成抑制効果（平成元年度）

供 試 薬 剤	使用濃度		調 査 発 病 葉 数	花 ぐ さ れ 率		分 生 胞 子 形 成 率		薬 害
	希 釈 倍 数	成 分 量		5/4	5/6	5/6	5/8	
	倍	ppm		%	%	%	%	
トップジンM水和剤	1,500	467	20	15	20	10	30	—
ロニラン水和剤	1,000	500	20	5	5	0	5	—
無 散 布			20	65	70	70	90	